震災・原発事故から8年半が経った。テレビはラグビーW杯や東京五輪・パラリンピック一色のように見える。しかし福島では被災者たちが、いまだに事故の足かせをつけながら、さまざまな不安を抱えて生活している。それぞれ何を思い、どういう日々を送っているのか。いわきで生きる3人から話を聞いた。

しずまらず

二〇一一年、粥塚さんは一編の詩を書いた。「ぼくは今日もいわきで生きている」。震災・原発事故が起こり、放射性物質が飛散した。当時、障がいを持つ人の自立生活を支援する仕事をしていた粥塚さんは3・11から二週間後、二十四時間介護が必要な四十人ほどの利用者たちをリフトカーに乗せて東京に避難した。介護に追われ、まるで野戦病院にいるような日々。しかし放射線量を気にする必要のない東京の日常にどっぷり浸っている自分がいた。そして一カ月後、水道が復旧したこともあり、やっといわきに戻った。

いわきではテレビで、県内各地の放射線量の数値が映し出されていた。テーブルの上には妻が綴った放射線量のメモがあった。それが妙に現実的で、生々しく感じた。「見えないものが数になっている。自分の、いわきでの空白の期間がここに残っている。これは日記だ」と思った。そこには、いわきと東京、どうしてもリアルに伝わらない距離があった。

今日は毎時〇・二一マイクロシーベルト
少し下がったね
あしたはもう少し下がるといいね
―これが夫婦の会話です

表面的には、何事もなかったように見える生活。しかし周辺には目に見えない放射性物質があり、その数値が毎日、テレビからテロップで流れている。自分が東京にいた一カ月間、妻はその数値をメモしていた。

ひかるもの
粥塚　伯正

生きると
すこし生涯がのこる
生きていると
のこりにあかりをともし
もう少しだけ
もう少しだけ
誕まれてきたことを考える

ひかってる
ひかっているね
落ちていく花を
いちまいいちまい
見おくっていた
いくつもの色にひかって
おちていく花を
じぶんをいれて
数えていた

生きると
すこし生涯がのこり
もうすこし　もうすこしだけと
あかりを
すこし前にすすめる

すすめられるあかりは
とつぜん立ちどまり
何かわたしでないことがおき
壊れる音がたくさんして
生涯になった

詩集『婚姻』

新詩集『婚姻』の締めくくりは、くしくも「ぼくは今日もいわきで生きている」になり、最終ページには「しずまらず」という言葉が三行だけ、リフレインのように刻印されている。それは最初から意図したわけではなく、編集作業のなかで自然に収まったのだという。

少しの中断期間があったとはいえ、二十二歳のときから四十五年間にわたって詩を書き続けてきた粥塚さんはこれまでに、二冊の詩集を出している。『乱球』(一九八二年)と『幻影の庭から』(一九九三年)で、『幻影の庭から』は県文学賞詩の部門で奨励賞を受け、その翌年、詩十編をまとめた「塔の夢」が準賞になった。さらに次の年(一九九五年)には、『水棲類』(詩十編)で最高賞である正賞を獲得する。

自ら「最初の詩集は暴力的で観念的だった」と言う詩の表現は、娘の誕生をひとつのきっかけに穏やかになり、日常と内面を往き来しながら言葉に置き換える、清楚でしなやかなものになっていった。そして3・11を体験し、「ぼくは今日も…」が生まれる。

新しい詩集をまとめるにあたって、県文学賞正賞の「水棲類」以降、二十五年間に書いた作品、三十篇ほどから選ぶことにした。試行錯誤が続くなか、一冊の詩集としてリズムや流れ、物語性などを意識して十七篇を選び、並べた。すると不思議なことに二〇一一年からいままでの詩に集約され、一番新しい「雨の練習」から二番古い「ぼくは今日もいわきで生きている」の順になった。

「これは意外だった。この詩集は東日本大震災を意識してつくったわけではないけれども、編集作業をしていたら二〇一一年以前の詩は外れてしまっていた。あっ、と思った。原発事故が起こったあの日(三月十二日)が原点になっていて、また新たに、そこから始まる、ということなのかもしれない」と粥塚さんは言う。

『婚姻』というタイトルは、フランスの美術家、マルセル・デュシャンの作品名からヒントを得た。詩集のなかに「婚姻」という作品はなく、詩集全体、すべての詩が婚姻を表している。生と死の婚姻、あの世とこの世の婚姻…。根底には異界が広がっていて、能や柳田国男の世界などともつながっている。

八年前のインタビューで粥塚さんは「知らないという怖さ、まったく知らされていなかった怖さというのがある。地震、津波、そして原発事故や放射能。そういうことで自分自身、変わるのが悔しい。この詩集『しずまらず』は鎮魂じゃなくて、鎮めない、鎮まるな、という怒りでもある。だからぼくは、今日もいわきで生きている」と話している。

しずまらず
しずまらず
しずまらず

という三行で終わっている。

吉増剛造さんとの出会い

詩を書くことを中断した時期や理由について尋ねると、「書けなかったということ。書く必要もなかった」と、粥塚さんは言う。そうしたなかで仕事をしながら、年一回発行している詩誌などに寄稿していた。それが、粥塚さんと詩をなんとかつないできた。

二〇一七年だった。東京国立近代美術館で「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」が開かれた。(怪物君)と題されたドローイングのような自筆原稿、映像、写真、オブジェ…。詩人の枠を超え、聴覚や触覚なども刺激する展覧会で、その多様な表現を見て粥塚さんは衝撃を受け、触発された。前から吉増さんの作品は好きだったが、展示やパフォーマンスに触れて、詩人の魂が再燃した。手紙のやりとりが始まり、さまざまな催しの招待状が届くようになった。こちらから近寄っているわけではないのだが、不思議と波長が合う。「もしよかったら」と誘われて行くと、緊張することもなく穏やかな気持ちになれた。それがきっかけで、詩のことをさらに深く考えるようになった。考えれば考えるほど深く、途方もない。それをどうやってやるのか。その一番近いところにいるのが、吉増さんなのだという。

詩集『婚姻』を吉増さんに送ったら、すぐ葉書が来た。そこには「あめあめ/あめ降る/地面です」という「雨の練習」の最初の部分が引用され、「静かに落ち着いて詩の地面を濡らすトーン」という一文がしたためられていた。

吉増さんはいま、「リボンアートフェスティバル2019」の関連企画として宮城県石巻市の鮎川浜に滞在し、「詩人の家」と呼ばれる民家で執筆や制作、観客との交流などを行っている。今月二十九日まで宿泊棟に泊まれることになっていて、粥塚さんのもとに吉増さんから「いらっしゃい」と誘いが来た。「まさか、こんなに深くつきあうようになるとは思ってもいなかった。二泊ぐらいして吉増さんときざまな話をしたい」と粥塚さんは言う。

だからといって、詩は自分がやりたいものだったのかというと、そうでもないんです。もちろん楽しみもあるけれども、あえて苦しみに入っていくという気がないと、詩は書けませんから。ボーッとしていてはだめなんです。それもあってか、詩を書く若い人が減っているような気がしています。

最近、「遡せるものは言葉」と思えるようになりました。詩を書くということは、ぼく自身の言葉のDNAを遡すということなので、「八十歳」といった年齢で区切らず、詩で年をとっていくことにしたんです。一つ書いて、二つ書いて、その間に何年かが過ぎる。そんな感じです。あとはどっちみち、召されていくわけですから。

いま思うこと(独白)

この詩集で「しずまらず」の三行を最後のページに入れたのは、生き続けるということです。詩人なら詩を書く、絵描きなら絵を描く、職人ならものをつくる…。震災・原発事故を体験して、普段通りに生きるのは難しいし、普段通りの生活などできるはずもないわけですけれども、震災を踏まえて生き続ける、ということだと思います。

原発は絶対に反対だけれども、それを直接的に詩にはしていません。ただ「ぼくは今日も…」だけはプルトニウムとマイクロシーベルトという言葉が入っています。この二つを入れないで原発のことを詩にできないものか、と思ったのですが、避けられませんでした。

詩集に書かれているのは、原発事故後にみんなが味わった生活のような気がします。そうした時間が微妙に流れています。「原発反対」とか「事故から立ち直れ」とか「みんなで輪になろう」とか、直接的な表現はないけれども、最終的には個人に来るのだと思います。生と死の間の世界が、最初の「雨の練習」からずっと、音として流れている、と自分のなかでは思っています。だから「しずまらず」であり、生きていくということなのです。

年齢的なこともあると思うのですが、ある時期、八十歳を区切りにして詩を書こうと思っていました。いま六十八歳で、すぐ六十九歳になり、次は七十歳です。詩集を出すために焦っていたのかもしれません。断崖の上に立っている感じでした。でもやめました。「死ぬまで生きる」と思うようにしたんです。

例えば、文学賞なんかもらうと、「もういいや」とやめる人、書けなくなってやめる人、嫌になってやめる人、といろいろです。若いころは「詩をやめる」って大騒ぎしたこともありました。でも結局はコツコツと書いてきました。人生の目標が「これだというものを見つけること」とすると、それは自分のなかに刻まれるということだと思います。ぼくの場合はそれが詩でした。

ひびの古書堂
21-4881

週末の休みには必ず、妻と映画を観ます。以前は月一回ぐらい水戸方面へ遠征していたのですが、昨年六月に小名浜のイオンモールにシネコンができてからは週一回になり、五十本以上観た勘定になります。しかし心に響くものは、ほとんどありません。

若いときと比べると感性が鈍っている、というのは確かでしょう。でも、「きれいだ」「おもしろい」だけなのです。興行収入は評価とは別に宣伝費のかけ方で決まってしまいます。話題の「天気の子」もストーリーや設定が単純で、すぐ記憶から離れていきました。強いて上げれば「カメラを止めるな!」が、見事な変化球として心のミットにピタッと収まったという感じで、印象深い映画になりました。

いまの映画は、「面白ければいい」という時代を象徴しているのかもしれません。メッセージ性が希薄なのです。あれほどの大金をつぎ込んでいるのに、その場限りのわくわくドキドキでいいのか、という思いもあります。かつてはそうではなく、「日活ロマンポルノ」にも思想がありました。おそらく観る側も劣化しているのでしょう。わたし自身、義務感で観ているところもあるので、反省しています。

ONAHAMA STORY
映画をめぐる話

丸浜運輸株式会社　代表取締役 里見　潤　本社 いわき市泉町滝尻字橋本1-11　TEL(0246)56-2266　FAX(0246)56-2850

いわき・ら・ら・ミュウイベントのご案内
海と踊りの競演!
いわき・ら・ら・ミュウ
YOSAKOI舞祭
9月22日(日)　10:30～15:30　会場:南側広場・西側広場
県内外からYOSAKOIや舞祭など約15チームが集結し、一日を通して演舞いたします。
(営業時間) 9:00～18:00 (飲食・レストランは10:00～)
〒971-8101 いわき市小名浜字辰巳町43-1
TEL.0246-92-3701
http://www.lalamew.jp

粥塚伯正さんが詩集『婚姻』を出版

原発事故後に味わった生活を投影

粥塚伯正さん(68)が第三詩集『婚姻』を自費出版した。まとまったかたちでの発表は25年ぶりで、震災・原発事故から8年の間に書かれた17編が収められている。詩と詩人の婚姻を夢見ながら、ようやく結ぶことができた詩集。「これからも詩を書き続け、詩で年をとっていけたら」と、粥塚さんは話す。